

# 日中の文化的生活の比較

劉 淑 蘭

## 1. 始めに

中国では近年、日本語に対する関心が高まると共に、日本事情、日本文化に対する学習者の関心も高まりつつある。学習者の関心の内容はレベルによって様々であるが、私の所属している北京連合大学外国語師範学院日本語学部3年生延べ300人ぐらいを対象にして、5年間にわたりアンケート調査した結果、半分以上の学生は現代日本人のライフスタイル、余暇ライフなど、具体的で主に目に見える部分の文化に極めて興味を持っていることが分かった。又、中国の私の学生たちから、「日本人のよく言う文化的生活とか、人間らしい生活と言うのは、一体どんなことを指しているのか、日本人は物質の面においても、精神的な面においても、本当に豊かになってきたのか」などとの質問を受け、文献、資料で得た知識を持って、それらの質問に答えていたが、私自身、釈然としなかった。

今度、文教大学言語文化研究所のお陰で、半年ほど勉強させていただき、現在の日本で、日本人の生活をこの目でつぶさに観察することができた。本稿では、日本人の余暇ライフの変遷を通して、標題の「日本人の文化的生活」を見ようと思う。これは、日本及び日本人を理解する上に、大切なことだと思われるからである。

## 2. 文化とは何か

戦後の日本では、文化国家と言う言葉がよく用いられ、憲法にも「健康で文化的な…」と言う言葉が用いられたので、文化と言う言葉が何を意味

するかについては、日本人がかなりの関心を持つようになってきたのである。

「文化」を広辞苑の定義で見ると、

ア. 世の中が進歩し、文明になること、開けること、文明開化。

イ. 文徳で民を教え導くこと。

ウ. 人間が学習によって、社会から習得した生活の仕方の総称、衣食住を初め、技術学問、芸術、宗教など物心両面にわたる生活形成の様式と内容を含む。

又、「中間領域で、文化をとらえ、生活に根ざした自主的、自力的な創造活動」である※一般に、文化と言うと、教養を身に付け、知識を備え、上品な行動のできる素養の基盤のようなものを指していると思う。具体的に言うと、人間らしい生活をするための学習、スポーツ、芸術、趣味、ボランティアの総称を文化ととらえてもいいだろう。

「文化的」を三省堂国語辞典の定義で見ると、

ア. 文化に関係あるようす。

イ. 文化にかなうようす。

一口に「文化」、或いは「文化的」といっても、その範囲は広く、漠然としたものだと思う。

歴史的に見ると、周知のように、日本文化を形成している非常に多くのものは、中国起源であり、中国と共通の文化が多いのである。かつて、中国は「礼儀の邦」として世界に知られていたのだが、日本文化も儒教に影響され、今も儒教を源とする東洋文化圏の一員であると言えるだろう。

日本は一九世紀の徳川幕府末期まで、中国を師とし、中国から仏教、孔子、孟子、荘子、陽明学などの思想を吸収し、農耕、紡績、製陶などの各方面の生産技術から文学、芸術、書道、絵画、医薬、スポーツ、更に唐以後の律令制度、政治経済体制などを学んだ。日本人は、とても、勤勉で、

賢くて、他人の長所を学ぶことに長じている。文字というものを取ってみても、平仮名、漢字、片仮名、更にローマ字を組み合わせながら、さまざまに異なる微妙な感覚を伝えているのである。このことでは、日本人が結婚式はキリスト教会でやって、葬式は仏式でこの、初詣は神社でという宗教シンクレティズムは文化のパターンとして、どこか似ているのかも知れない。日本人は漢字を利用して、自分の文化をつくり、日本独特な文化を形成した。その意味で、日本民族は非常に特色のある民族だと言える。

現代の日本社会は、地球上において、最高度の文明生活を享受することのできる社会の一つである。特にその科学技術に関しては、ヨーロッパやアメリカの先進国と比べても、少しもみおとりしない。分野によっては、それを上回るほどの発達を遂げているといってもいいだろう。

エレクトロニクスやバイオテクノロジー、或いは原子力というような最先端科学技術において進んでいるだけでなく、その成果がたちまちにして、大衆社会に浸透し、活用されるという意味での高度技術社会である。例えば、大衆の日常生活に対するコンピュータの浸透ぶりは、おそらく日本が世界一ではないだろうか。自動車、鉄道などの交通機関、電話、テレビ、ビデオなどの情報機器の発達は質量ともにヨーロッパのどの国をも上回っているのではないだろうか。

だから、経済的に成長した「豊かな社会」の到来と政治的安定とは、日本人の間に「文化と、アイデンティティー」への強い要求を生み出してきたのだと思う。

### 3. 文化の時代

日本では、「文化」が現代において、なぜ要請されているのか、といえ、これまでの時代要請であった「近代化」ないし、「工業化」がその目標を一応達成したからだとされるだろう。

故大平総理は、1979年4月の「文化の時代研究グループ」の第一回会合の席上で、日本は「戦後30余年、経済的豊かさを求めて、脇目もふらず邁進し、顕著な成果を取めてきた。それは特に、明治以後30余年において、欧米諸国を手本として進めてきた近代化工業化の偉大な精華である」とすると同時に「かつてない自由と豊かさは人々の心にこれまでの工業文明や近代合理主義のもとで、ともすれば見失われがちであった人間性のいくつかの大切な側面への反省を促している」といい、国民が「家族や、地域や、職場における暖かい人間関係の回復を求めていることは、近代合理主義に基づく物質文明が飽和点に達し、近代化の時代から近代を超える時代に経済中心の時代から文化重視の時代に至った」ことの表れだと述べていた。

#### 4. 日本人は「文化」、「文化的生活」をどう理解しているのか。

1987年7月、東京都情報連絡室の文化に関する世論調査によると、「文化」という言葉を聞いて、浮かべるものを自由に答えてもらったところ、第一位「芸術、趣味」24%、つづいて「生活豊かさ、繁栄」19%、第三位が「伝統、歴史、風俗」12%、であった。これを前回の調査、1981年と比較して見ると、「生活の向上、豊かさ、繁栄」が、56年の調査の12%から19%へ、「文化人、文化の日」が、4%から8%へ、それぞれ増加し、「精神的な価値」が、前回調査の、11%から4%へ減少しているのが目立っている。

具体的に、第一位、第二位、第三位の示す内容は、次の通りである。

第一位：芸術、趣味。

芸術；書物；読書；音楽；絵画；美術；文学；小説；映画；趣味；スポーツ。

第二位：生活の向上、豊かさ、繁栄。

生活の向上：よりよい生活に向けての進歩、努力。

生活の豊かさ：豊かな暮らし、便利さ、進歩、発展、物質的な豊かさ。

繁栄：国が豊かになること、経済的、精神的に安定し、ゆとりのあること。

第三位：伝統、歴史、風俗。

歴史：世の中の移り変わり、歴史の流れ。

伝統、風俗、習慣、しきたり、生活様式。

以上から見て、簡単に「文化的生活」とは何か、と言うと、生活の文化度と言えるのではないだろうか。

又、同じ1987年、7月の世論調査によると、

自分の生活が、「文化的である」と答えた人は15%、「やや文化的」48%、合わせて62%が自分の生活は「文化的」と考えている。「あまり文化的でない」は31%、「文化的でない」は6%、合わせて37%の人は自分の生活を「文化的でない」と考えている。性、年齢別に見ると、「文化的である」と思う人は、男性では30代、65%、40代、64%、多く、50代、52%、20代、53%で少ない。

女性では20代、71%で最も多く、年齢が高くなるに従って、「文化的である」と思う比率が少なくなっている。

既婚、未婚別でみると、生活が「文化的である」と答えた人は、未婚女性が、75%と最も高く、逆に最も低いのは、未婚男性50%である。次は、同調査での東京の文化的評価とその理由についてであるが、

東京を文化的な都市だと「思う」人は81%、「思わない」人は17%で、5人に4人が東京を文化的な都市だとしている。

東京を文化的だと思う理由では、「生活の便が良い」27%が最も多く、次いで「文化」14%、「交通の便が良い」11%などと上位に続いている。

一方、文化都市だと思わない理由としては、「環境が良くない」25%が最も多く、次いで「情報量が多く、複雑」22%、「人間が多すぎる、人間味がな。」12%、「文化の質が表面的である。」12%などが主なものである。

### 5. 文化創造の土壌としての余暇

個人的にも、社会の視点から見ても、余暇は文化を生み出す条件の一つとして、重要な意味を持っていると思う。

労働に従属して、生産のみに追われていたのでは、文化は創造されない。文化創造の土壌には余暇は不可欠の要素である。

さて、余暇という言葉は、何なのかというと、「労働から解放された時間に行う休息、気晴らし、自己開発活動の総称」と、(デエマズディエは中島巖訳「余暇文化に向かって」)と定義づけた。大衆余暇はテレビを最優先に、映画、レコード、マンガ、新聞、出版物、ギャンブルなど、受け身的で金銭を媒介として、コピーを買うという行動様式が大事であった。ある意味で、主体的参加ではなく、「させられ型」であり、遊んでもらう式の余暇が一般大衆の圧倒的支持を受けた。

労働との関連で考えると、日本の場合、労働の機械化によって、人々は仕事で完成する喜びを得られなくなった。大量に生産されたモノの消費に明け暮れても、決して心の満足は得られないことが分かってきた。それで、人々は最も手っとり早く増大する余暇に生き甲斐を求めたのである。

1970年代に、欧米ではこうした心の満足感を求める場としての余暇はとらえられるようになってきた。急速に活発化する大衆は、余暇の活用の努力によって、個人の余暇を自らのデザインに基づいて、知識と技術を取得して、主体的に文化を創造する時代に突入したように思う。さて、日本はどうであろうか、1970年代以後、高度経済成長の終焉とともに、脱マスカルチャーの傾向が顕著になってきた。テレビ離れが静かに進行している

し、コピー文化はレコード、新聞、映画、マンガ、週刊誌、出版物を見ても、低落現象が進んでいた。こうした余暇活動の減退と呼応して、健康、学習、ファミリー、コミュニティ創作といった活動がだんだんと活発化してきたのである。民間のカルチャーセンター、文化教室、講座、成人大学、スポーツ教室、大学開放講座など、文化の時代は華々しい社会現象として見られたのである。

文化活動を奨励するために、日本の文化庁においては、芸術鑑賞機会の提供、文化活動の奨励などを行っている。文化庁では、各地域の子供及び青少年を対象に優れた舞台芸術の巡回公演を行う「子供芸術劇場」、及び「青少年芸術場」を都道府県などの共催により実施している。これは余暇を豊かにする上で、また、青少年の健全育成の上で極めて重要なことだと思う。

公民館は市町村、その他一定地域内の住民のために実際生活に即した教育、学術及び文化に関する各種の事業を行い、住民の教養の向上、健康の増進、生活文化の振興などに大きな役割を果たしたと思う。

公民館の設置状況は「昭和62年10月1日現在」

総 数	市(区)	町	村
17,440	7,560	7,914	1,946

公民館に対する平成2年度の文部省補助金の予算額は144館分、45億3,600万円である。

そのほかに、主婦に人気のあるカルチャーセンター、大規模な施設が次々とオープンした「NHK文化センター」、「東京文化センター」のような大規模なセンターが日本には、約300カ所あり、一万人以上を収容でき

るセンターは日本全国に約10か所あり、約、30万人の主婦がカルチャーセンターに通っている。東京、新宿にある「朝日カルチャーセンター」での受講者の数は4万人にのぼる。

その学習内容は大別すると、

ア、体育・スポーツ　イ、生活文化　ウ、語学　エ、教養  
オ、芸術、趣味などに分けられる。

翻って、この面に関する私個人の体験を記しておきたい。

文教大学言文研には、この二三年、余暇の充実のために、開設した講座がいくつかある。それには、学生のほかに、社会人も結構参加している。昭和63年成立以来、13回も講座が開かれた。

この度、平成3年6月15日—7月13日まで、文教大学生生活科学研究所によって主催された大学公開講座は「食の現在を考える」、つまり、日本人の食文化である。これは専ら社会人に対象して、参加する人は80人ぐらいである。そのうち、男性も六、七人入っている。皆、日本の食文化に大きな関心を持っている。

私の友人千原さんは六十代で、指圧の先生であるが、平日、お仕事で忙しいにもかかわらず、余暇において、週に二時間中国語を勉強したり、三味線、笛、民謡などを習っている。

友人の鈴木さん夫婦も週一回、公民館の社交ダンスに通っている。

労働に代わって、余暇を重視するという考え方は、10年前の日本においては、青年層を代表する考え方であった。中高年は労働を重視する考え方が強く、余暇はあくまで労働の従属物でしかなかった。しかし、近年の日本では、中高年においても、青年と同じように労働よりも、余暇を大切にする人々が確実に増加してきている。

これは、日本人の価値観が変わってきていることを意味しているのである。余暇がそれ自体として、重要活動であるという認識が高まってくるに



したがって、自分を高め、関心分野を追求するという自己開発を中心に考え始めたのである。

最近の動きとしては、日本のサラリーマンも、主婦も従来の気晴らしレジャーに満足せず、本物の余暇を求める志向が高まってきている。ギャングブルや、テレビに代わって、急速に台頭してきている余暇活動には、以下のような二つの分野がある。

### 1. 体育、スポーツ活動。

従来は、スポーツといえば、若者の特権のように考えられていたが、現代の日本では、ジョギング、体操教室、テニス、美容体操などに見られるように中、高年層のスポーツ活動は極めて、活発化している。また、野外活動、登山、水泳、キャンプなど、自然を相手にする活動も盛かんになってきている。

### 2. 学習、趣味活動

近年、日本人の学ぶことへの欲求は、大変な高まりを見せていると思う。文部省調査では、50%の人が何らかの学習をしている。学習したいという人は70%と報告されている。

行政の提供する公民館、婦人教育センターなどで主催する学級、講座には、日本全国で400万人が学んでいる。また、大規模なものだけでも、カルチャーセンターは100箇所ぐらい設立され、日本全国で40万人が学んでいる。大学開放講座も、201大学、開設講座数1,181、受講者数、11万人に達している。

ともかく、大変な数の日本人が、余暇で、文化活動、趣味活動に取り組んでいる。これらの活動は日本人の文化的生活を豊かにする上で、欠かせないものになっているといえるだろう。

## 6. 中国人の文化的生活

中国は、今までさまざまな事情で、経済の面においては、先進諸国に先に先にと追い越されてしまった。おまけに12億近い人口を擁する世界一の人口大国なので、いくら生産しても、人々の需要に追いつかない現状がある。そして、圧倒的多数の中国人は、毎日労働に明け暮れて、余暇をどう使うかということまで関心が持てていないと思われる。

中国は農業国で、人口の80%は農業に従事している。農家は早起きが尊ばれ、東に太陽が昇り、あたりが明るくなるとともに起きて、山や畑に出掛けていき、夕方、日没となると一日の仕事をやめて家路につく。

雨が降れば、畑に出掛けることは出来ないから、農作業は休みとなり、家の中で様々な手仕事をしたり、体を休めたり、少々の娯楽をして、雨のやむのを待つことになる。めぐる自然のリズムに従って、春には種を播き、夏には肥料をやり、田の草取り、秋になると刈り取りを行って、やがて冬を迎え、農作業は休みとなり、春の準備と一年の休養の季節がやってくる。

農家の生活は決して楽ではないが、余程の天候不順がなければ、家族は食べていける。このように一日一年という自然のサイクルに従って、働きかつ休み、娯楽に興じた。

70年代末期から、80年代にかけて、中国では、経済改革、対外開放を行ったために、各地域、各階層の人々の間に余暇生活の多様化が見られるようになってきた。とりわけ、都市近郊、農村の変化は大きい。余暇には、テレビを見るだけでなく、親族、親友の家庭を回り、若者は集まって、雑誌や、トランプなどをして遊ぶ。機会があれば、大都市へ観光に出掛ける風景も見られるようになった。

中国の農村で、「文化戸」という言葉が今流行っている。つまり、農村において、専門的に書、絵画、図書、表装、花屋、盆栽、築山など文化的

サービス活動に従事している人が「文化戸」と呼ばれているのである。こういう「文化戸」はだんだん増えてきている。

中国人の余暇の特徴から見ると、傾向として、自娛自楽（個人的娯楽）意識が高まっていると言える。

上海を例にしてみると、延べ16万人が47カ所のアマチュア芸術学校、及び7,947か所芸術訓練班で習っている。内容は主に音楽、踊り、演劇、絵画、書道、写真、美容教室、裁縫、料理、外国語、拳道、ヨガ、ファッションモデル教室などである。

もう一つの特徴は、共建活動である。つまり、町は町にある工場、学校、商店、兵士などが協力し合って、文化的活動を行うということである。それで、上海市が132の町は、42か所に「大衆文化協作委員会」が設けられた。これは、人々の余暇生活を豊かにする上で、非常に大きな役割を果たしている。そして、これらの文化娯楽活動は、常に思想性、娯楽性を重視する上で行われている。

組織の仕組みから見ると、次の通りである。

上海市は、市、区、末端組織（まち）という3つのランクに分けられる。つまり、市においては、大衆芸術館、労働者文化宮、青年宮、少年宮が一か所、労働者文化宮、労働者会館が22か所、それぞれあるのである。町、村においては、文化活動教室が350か所、文化センターが161か所ある。又、市、区企業合弁のクラブが695か所もある。

ここ2、3年来、中国では、カラオケが大流行している。カラオケは1989年後半から、流行出したのであるが、1990年に、アジア競技大会があったのも手伝ってことか、北京だけでも53軒に増え、週末ともなると、若者たちのストレス解消、新しい娯楽の場となって、賑わっている。お客は、たいてい、会社、ホテルの従業員が多く、年齢的には、20代が70%、30歳代が27%という。

もう一つの大流行は社交ダンスである。

1985年7月の統計によると、上海市には、ダンスホールが136か所もあり、毎晩2万人収容できるそうである。そのホールは、大きく二種類に分けられる。

一つは、9か所ある外国人、華僑、香港人、マカオ人向けのダンスホールである。

例えば、

錦江飯店、華僑飯店、上海大廈、上海賓館、香格里拉餐厅、丁香賓館などである。もう一つは、庶民向けのダンスホールである。

1986年末の統計によると、上海市の92か所のダンスホールでは、毎晩延べ、1、46万人を収容したそうである。

その一つの、北京市宣武区槐樹街中の老年活動センターを例にして見よう。

20平方メートルあるこじんまりした一室に、火、木、土、日、週4回、夜の7時から、10時まで、230人ぐらい、民族楽団の伴奏に合わせて、ダンスに熱中している。伴奏者はほとんど停年退職した6代のお年寄りである。フロアの回りにゆっくりとお茶を飲みながら、休んでいる人もいるが、踊っている人も、伴奏している人も皆楽しそうにこの一時を過ごしている。入場料は、たった50銭（15円相当）である。

いずれにせよ、中国の農村であれ、都市であれ、文化的活動を中国全土で引き起こし始めた今日この頃と言えるだろうか。もちろん、文化的生活のレベルから言っても、文化的環境から言っても、まだまだ、日本には及ばない所が多くあると思う。960万平方キロメートルある広々とした土地に、12億もの国民が伸び伸びとしたレジャーを楽しむようになるためには、並々ならぬ努力が必要だと思われる。経済的な面においても、よほど力を入れないと、文化ホール、図書館、運動場などスポーツ施設の新設

は、とても不可能なことだと思う。

## 7. 結び

中日両国は、社会の仕組みも、経済の発展ぶりも、それぞれ違うにもかかわらず、文化的生活の有り方としては、仕事一辺倒ではなく、余暇も両立させて、私生活も大事にしたほうがよいという意識が共通点だと思われる。

中国においては、有給休暇になると、消化率は100%といえる。日本の場合はどうであろうか。年次有給休暇は労働者一人平均14.8日が認められているのに、取得日数は平均、8.8日で、消化率は60%に過ぎない。

製造業、生産労働者の年間実労働時間から見ると、

	日本	アメリカ	イギリス	西ドイツ
1987	2168	1949	1947	1642

日本の労働者たちは、西ドイツより年間に500時間以上も長く働き、残業や休日出勤などでくたくたになり、ノルマ達成の競争で、精神的に追い詰められ、「過労死」という深刻な現実を直面している。

日本は今や、国民所得、資産蓄積、消費の多様化、高級化などあらゆる面で、世界に冠たる「豊かな社会」だと言えるだろう。しかし、「豊かさを実感しない」日本国民が七割近くに達している。日本語の「豊かさ」、古くは「ゆた（寛）」という形で使われていて、その意味は「ゆったり、のんびり」である。このことに照らせば、日本人が「豊かさ実感」に乏しい理由が理解できる。日本人の生活は時間・空間・経済など、多くの点では、「ゆとり」に欠ける生活をしているのではないだろうかと思ふ。

ところで、「ゆとり」とは何か。

ゆとりとは「自由にできる空気・時間・気力・体力などがあること」（明解国語辞典）だと言える。とすれば、「豊かな」生活とは「生活をつくっている諸活動が「自由」に展開される生活なのである。海外純債権世界一、国民一人あたり GNP 世界第二などの「豊かさ」の中で、日本国民自身が自らの生活を「豊か」だと思わないわけがここにあるのではないだろうか。

文化的生活を言い換えれば、精神的生活と言えるのである。中国の人々の物質的生活はそう豊かではないが、精神的な面においては、ある程度、日本人より充実しているのではないだろうか。

日本は、これから、精神的生活の面においても、もっと、経済の発達とバランスを取れたらいいのではないだろうかと思うが。とどのつまり、「物の豊かさよりも心の豊かさ」にする必要があると思う。

付記として、次は、北京夕刊に載せてある写真から、北京の人々の余暇生活を見よう。

1991年3月3日 第4面

この数年来、北京の朝の運動は、熟年層、老齡層が時代の流れを先取りしている。アジアスポーツ大会終了後秧歌\*をするのは又、朝の運動のブームになってきている。お正月15日午前、熟年層500名ぐらい、月壇公園で集まって、健康秧歌大演出をしている。ご覧の通り、彼等は又、時代の新潮流の行き手になっているのではないだろうか。



似乎近年来北京的晨练总是中老年人领导新潮流。亚运会后，扭大秧歌又是北京晨练中很“潮”的热门儿。正月十五上午，500多名中老年人在月坛来了个健身秧歌大联欢，您瞧，他们是不是又要领导新潮流了？马望真摄影 刘撰文

1991年3月3日 第5面

朝陽区書画協会成立10年来、メンバーは100名になっている。彼等は末端組織（まち）から来て、又、末端組織（まち）に奉仕している。

いつも、農山村や、工場、鉱山に行つて、その場で絵を書いたり、個人展を開いたりしている。写真は、彼等が日壇公園へ遊びに来た人々に絵や書を書いたりしていることである。

朝阳区书画协会成立10年来已发展会员近100名，他们来自基层也服务于基层，经常深入农村、厂矿为群众作画，并多次举办展览。  
因为他们  
们在日坛公  
园为群众题  
字作画。  
张 伟 摄



1991.3.3.R

1991年3月11日 第4面

西城区女子健美体操試合

各企業、各町から二十の代表チームが参加し、西城区副食公司青年チームと二龍路老年チームがチャンピオンになった。写真は二龍路老年チームが健美体操をやっているところです。



▲ 西城区女子健美操比赛日前举行，来自行业系统和街道系统的20支代表队参加了竞赛，西城副食公司青年队和二龙路老年队分别夺魁。图为二龙路老年队在表演中。  
马望真摄

1991年3月17日 第5面

羅曼夢百名モデルファッション演唱大会は、夕方、労働者体育館で行われた。モデルさんでありながら同時に歌も踊りもするというやり方は、これは、中国で始めてなことである。

全国各地から来たモデルたちは美しいメロディーに合わせて、様々な色とりどりのファッションを皆に披露している。

左の写真：北京新世紀広告公司モデルチームの演出は、皆に深い感銘を与えた。

右の写真：アメリカ籍の華僑劉蘇珊は、有名な美容師で、皆に世界一流のヘアスタイルを見せるために、珊美容院の“弟子”を連れて、モデルたちに無料でサービスしている。

..... 1991年3月17日 ・ 5 ・ .....



羅曼夢百名模特時裝展示演唱會昨晚在工人體育館舉行。這是國內首次百名模特同台，將時裝和歌舞融於一體的大型服裝晚會。來自全國各地的模特們伴著悠揚的歌聲款款展現著樣式各異的時裝。左圖：北京新世紀廣告公司時裝表演隊的模特彭莉、劉亞美、高杰、

郝文慧和楊慧錦的表演給觀眾留下深刻的印象。

右圖：美籍華人劉蘇珊是著名的美容、美髮大師。為了能讓觀眾一飽世界新潮髮型，她帶領蘇珊美容院的眾“弟子”為模特們義務做化妝。



1991年3月19日 第4面

朝、毎日地壇公園集芳園前で、庶民は国際標準社交ダンスに熱中している。



毎日清晨，在地壇公園集芳園前，人们聚集在这里，举行国际标准社交舞会，情趣盎然，乐意融融。  
1991年3月19日 贾红安摄

1991年3月24日 第五面

参加者で賑わっている朝陽区労働者文化宮。

朝陽門外町にある朝陽区労働者文化宮は、敷地面積は大きくないけれど、毎日、賑わっている。人々を敬服させる力があるようである。

左の写真： 美術絵画班。人々の余暇生活を豊かにし、また、社会に向けても多くの人材を養成している。

右上の写真： 老齡活動室に、朗らかな笑い声が満ち溢れている。道端にしゃがんで、日なたぼっこだけに満足しているお年寄りたちではない。

右下の写真： 小さい図書館に6万冊も本がある。



本稿を作成するに当たって、ご教示を下さった言文研の近藤功先生、な  
らびに勅使河原先生、泉敬子先生、遠藤織枝先生、ほか多くの方々に深く  
お礼を申し上げる次第である。

参考文献一覧：

1. 「どうなる日本人の余暇のライフ」  
——欧米型余暇からの脱却のシナリオ  
瀬沼克彰 (1988年)
2. 「現代余暇の構図」  
地域社会と文化 2 瀬沼克彰 (1983年)
3. 「日本語教育」 73号
4. 「青少年白書」 平成2年版
5. 「文化に関する世論調査」(1987年7月)  
——東京都情報連絡室
6. 「住民と自治」(1991年2月号)
7. 「日本とは何か」  
——近代日本文明の形成と発展 梅棹忠夫
8. 「日本文明の歴史的連続性」  
——伝統社会とハイテク社会
9. 「経済」 4  
——世界と日本の経済
10. 「人民中国」(1991年2、3、4)  
——私の日本観
11. 「中国年鑑」(1991年版)
12. 「上海文化年鑑」(1987年)版  
\* 瀬沼克彰著「現代余暇の構図」大明堂

——地域社会と文化 2

——余暇時代への移行 第7ページ

- \* 秧歌：中国漢民族の民間で行われてきた集団的舞踊の一つである。  
中国東北地区から流行し始め、お祭や何か、国を挙げて祝う時に、人々は色彩鮮明な服装を着、手に色とりどりの帯のような布を持って、踊りながら歌う。又、秧歌は中国満族の間にも流行っている。

——中華民族風俗辞典 第698ページ

秧歌：もと中国農村の田植え歌。今では歌と踊りとで構成された、フォークダンスのような民族芸術となった。

——漢字源 第875ページ